

授業実践におけるプロジェクト型学習支援ツールの 形成的評価の試み

Evaluate of Support Tool for Project Based Learning in Higher Education Class

上田 勇仁* 合田 美子*2

Hayato UEDA Yoshiko GODA

株式会社デジタル・エデュケーショナル・サポート*

DIGITAL EDUCATIONAL SUPPORT Co.,Ltd

熊本大学大学院社会文化科学研究科教授システム学専攻*2

Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University

＜あらまし＞ プロジェクト型学習は高等教育機関において導入されはじめ、その有効性が多数報告されているが、授業の実施においては、授業プロジェクト型学習を担当する教員の経験や勘に頼らざるを得ないのが現状である。本研究では、高等教育機関でのプロジェクト型学習の支援、普及を目指し、プロジェクト型学習支援ツールの開発に取り組んでいる。本稿ではこれまで開発した支援ツールを活用した授業を実施し、ツールの形成的評価を行った。その結果、ツールの有効性が確認され、「学習目標」「問題」の設計項目について、実施上の課題が明らかになった。

＜キーワード＞ 大学教育 インストラクショナルデザイン 授業設計 教授法 グループ学習

1. はじめに

近年、高等教育機関において、能動的な学びを促進する授業は多岐にわたるが、大学生の課題解決力を育成させるための教授法が注目されている。なかでもProject Based Learning（以下プロジェクト型学習）といった演習形式の授業で、大学生が成果物を創造する実践が多数存在することが報告されている（溝上 2007）。しかしながら、プロジェクト型学習の体系的なデザイン要素を検討しつつ、実践のなかでその効果を検証する事例はまだ少なく、授業プロジェクト型学習を担当する教員の経験や勘に頼らざるを得ないのが現状である。本研究では、プロジェクト型学習設計要素を踏まえたプロジェクト型学習支援ツール（以下支援ツール）を開発してきた（上田ほか 2013）。開発した支援ツールの形成的評価の結果、授業を実施する際の機能も必要であることが指摘され、教員や学生の振り返りを記入するシートを追加した（図1）。支援ツールを活用した授業を対象に、ヒアリング調査をおこない、支援ツールの効果を検証した。

2. 対象の授業

対象となる授業は、地方にある私立大学において、開講された授業であり、2013年11月～2014年3月に実施した。受講者は、人文学部 英語英文学科、社会学科に在籍する1～2年生11名であった。なお、2014年度の正課授業のプレ授業のため、非単位の授業である。授業内容は、リー

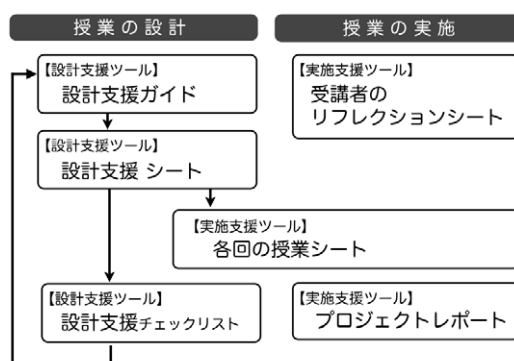


図1 プロジェクト型学習支援ツールの概要

ダーシップと異文化適応力のスキルと態度を身につけるために、受講者はハワイの初等中等教育で日本文化を紹介する模擬授業を行う。また、ハワイでの模擬授業を準備するために事前に日本国内で、ハワイに関する歴史文化を学び、模擬授業の練習を重ね、プレゼンテーション能力と語学力を養うことになっている。表1に教員が設計シートに記入した授業内容を記した。

3. 結果と考察

開発した支援ツールが授業実践のなかで、どのような支援に繋がっているのか検証を行った。授業実施期間中、授業を担当する教員Aに支援ツールの使い勝手や、使用方法についてインタビュー調査を実施した。

教員A「プロジェクト型学習を実施するうえで

表1 設計シートに記入した授業内容(一部抜粋)

設計項目	記述内容
授業のタイトル	ハワイ・サービス・ラーニング・プログラム
キーワード	リーダーシップ, 異文化適応力, 社会奉仕, ハワイ文化・社会, プレゼンテーション, プロジェクト型学習
授業内容	事前研修(ハワイの背景的学习と言語研修)と2週間のハワイ研修(大学での講義, 地域での奉仕活動, 交流活動)を通してハワイの生活・文化・社会と英語コミュニケーションを学ぶ
学習目標	<授業で得られるもの> 1. ハワイの言語や文化について授業と実践から学んだことについてまとめることができる 2. ハワイ社会の課題について授業と実践を通して学び, 課題をとりまく背景について自分なりの意見をまとめることができる <プロジェクトで得られるもの> 3. 協同活動を通して, リーダーシップ力に関わる自己の伸ばすべき強みと, 開発すべき弱みについて整理することができる 4. 目的や計画を参照しながら日々の行動を自己評価することができる 5. 英語を活用し, 現地での協同活動を行うことができる 6. ハワイの文化についてまとめて他者に伝えることができる
問題	現地の子どもや高校生が日本に魅力を感じ, もっと知りたいと思わせるプレゼンテーションはどのようなものか.
成果物	ハワイについてのプレゼンテーション, 現地小学生と高校生に対する模擬授業, 報告書, 異文化適応力診断結果に対する振り返りレポート.
チームの形態	3人組で事前プレゼンテーションと現地活動を準備する.

の, 意識付けにつながりました。自分はなにをしようとしているのか, 自分の好きなやり方でやっていたが, ちゃんと整理するという意味でよかった。それにそって, 授業をプランしている。(ツールを使って設計していなければ) 気の向くままに時間を使って行ったかもしれない。」

プロジェクト型学習支援ツールを使って, 授業を実施することで, 事前に設計した内容にそって企画的に運営が行われていることが推測される。

教員A「(学習目標を) 伝えたが, 学生に伝わっていない, 学生がこうした授業にたいして積極的に頑張るという概念がない。」

「(問題の提示について) 授業の冒頭は意識していたけど, 授業が進むにつれ意識が薄れたが(中間報告の) プレゼンを行う中で(問題に関する) コメントができた。」

学習目標, 問題の提示について, 設計段階ではプロジェクト型学習の特徴に沿って計画し, 授業の冒頭で受講者に提示したが, 授業を進めていく段階で, 教員と受講者が学習目標や問題について意識する機会が減少し, 日々の学習活動と学習目標, 問題が関連付けられていない可能性が指摘された。

教員A「(授業の進捗に応じて) 手放していくのが理想だけど, 学生たちが自ら動きにくいことがあるので, バランスを考えて介入したり介入しなかったりしている。ある程度, いろんなネタをもっていないと, 学生たちに反応するのが大変。」

教員は, 授業の進捗に応じて, 学生たちへの介入方法を変えようとしていることが明らかになった。教員は徐々に学生たちへの介入を減らしていくことを望んでいるが, 受講者が主体的に学習活動に取り組まない場合, 介入の度合いを考慮しつつ, 受講者と接していることが示唆された。

プロジェクト型学習支援ツールを活用した授業を実施し, ツールを使うことで, 事前に設計した授業を計画的に実施できていることが示唆された。一方で, 学習目標に対する意識づけや問題の提示方法や, 受講者の学習状況に合わせて効果的なファシリテーションを行うための支援に繋がっていない箇所もみられた。

今回実施した形成的評価は, 全てのデータが揃っていないため, 受講者のリフレクションシートなどについては, 検証することができなかった。学習の効果など詳細については今後検証する必要がある。

参考文献

- (1) 溝上慎一(2007) アクティブラーニング導入の実践的課題. 名古屋高等教育研究, 7:269-287.
- (2) 上田勇仁, 根本淳子, 鈴木克明, 合田美子(2013) 高等教育機関におけるプロジェクト型学習設計支援ツールの開発と形成的評価の試み. 日本教育工学会研究報告集, 13(3): 7-14